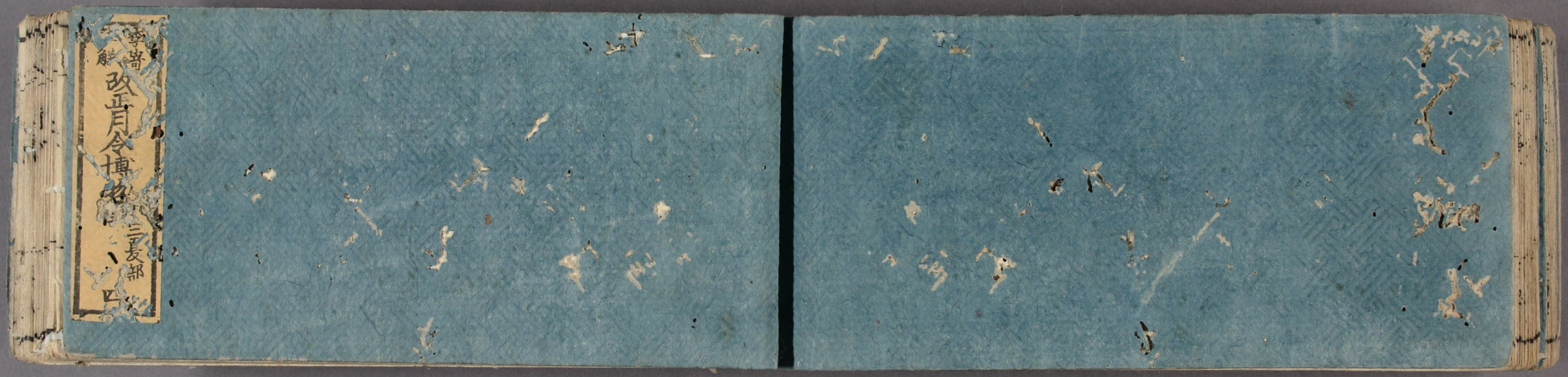
改正月令博物
三長部

夏部目録

○夏の天氣○占候○養生法等共ニ載

△印ハ夏三月ニ見ユル事ヲ記シ

夏時令

此部ハ夏三月ニ見ユル時候ヲ記シ

△夏日 二丁
△夏月 夏の霜 二丁
△夏朝 三丁
△夏夜 三丁
△夏野 五丁
△暑し△涼 五丁

夏州木

此部ハ夏三月ニ見ユル草木ヲ記ス

△夏草 五丁
△夏木 △夏木立△紅葉 六丁
△夏柳 △柳△柳さく 六丁
△椒 七丁
△夏暁 三丁
△夏夕 三丁
△夏山 四丁
△夏川 五丁

△荊蕊 ノ七ウ
△馬歯莧 ノ七ウ
△菖蒲草 ノ七ウ
△蕗 ノ七ウ
△藜 ノ七ウ
△蓼 ノ七ウ
△根芋 ノ七ウ
△蕈菜 ノ七ウ
△海松 ノ八ウ
△水草の花 ノ八ウ

夏生類

此部ハ夏の生物のいろ〳〵をあつむ

△蚊 ノ八ウ
△蚊遣火 ノ八ウ
△蚊柱 ノ九ウ
△蝿 ノ九ウ
△蛭 ノ九ウ
△蚤 ノ九ウ
△螢 ノ九ウ
△子子 ノ十四ウ
△蝸牛 ノ十四ウ
△蛞蝓 ノ十四ウ
△夏鷹 ノ十四ウ
△鷹鳥屋笼 ノ十四ウ
△鶴 ノ十五ウ
△蟬虎 ノ十五ウ
△蠅 ノ十五ウ
△鵜川 今鮎ノ子丹 △夜川 ノ十九ウ
△青鷺 ノ十六ウ
△鴨 ノ十六ウ
△鮎 ノ十六ウ
△胡麻 ノ十六ウ
△水鯰 ノ十六ウ
△水鱧 ノ十六ウ
△干鱧 ノ十七ウ
△干鰕 ノ十七ウ
△洗鱸 ノ十七ウ
△鯽 ノ十七ウ
△蟹鯉 ノ十七ウ
△隨鳥賊 △干いか ノ十七ウ
△魚籠 ノ十七ウ

夏雜

此部ハ夏三月の種々雜事をあつめしるす

△短夜 △明安き夜 ノ十七ウ
△蚊屋 ノ十七ウ
△扇 △伏翼 ノ十七ウ
△團扇 ノ十八ウ
△日傘 ノ十九ウ
△編笠 ノ十九ウ
△夏書 △夏花
△夏經 ノ十九ウ
△安居 ノ十九ウ
△夏書 △夏行 △二夏 ノ十九ウ
△新米 ノ十九ウ
△切麥 △冷麦 ノ二十ウ

△煮冷食　十九丁
△麦多粉　十九丁
△麦飯　十九丁
△水飯　廿丁
△草物　廿丁
△汗衫　廿丁
△汗巾　廿丁
△汗袖　廿丁
△汗手拭　廿丁

必用　此部ハ夏三ケ月の入用のこゝろ沢あまたしるす

夏養生　廿一丁
夏八氣　廿一丁
夏風　廿一丁
夏雲　廿一丁
夏霞　廿一丁

夏時令

此部ハ夏三月ハ四季ニ分ル時候の物をしるす

夏日　(題)　永

為家

日ハ長くこゝろのの風そよ〻　夏の

(連句)　白雲ハ袂そよ〻　夏衣　新し　宗祇

(詩)　夏日五字對句

九天鑪焔暖　避暑得深幽

六月玉聲寒　忘年遂久留

夏日之詞

明　黄氏

(詩)

深院塵消散午炎　篆烟如夢晝淹々　奥ノ深キ殿院ハ各別涼シク奇乗ニシテ塵埃モ消散シテ暑気ノ盛リヲ忘ルヽ　軽風似與荷花約　為送香来自捲簾　ソヨ〻ト吹風ニ荷ノ花トノ白ヒラ〻ト吹クルヤウニ花ト兼約アリテ花ヲ送ラ簾ヲ捲カモ分トナリ

夏月

夏の霜こもいとり

(詞) 新古今　頼政

庭の面はすがらかなるあふぎの
そらさをけみくすめる月の影

夫木　為相

袖出し　陸山の木ぬれる蔭りあらそ
うきくるる月の庭の影

千五百番哥合　後京極摂政

夏の雲はけそ　わくやうきの月
うつのよりくる山のうこの月

夫木　河上夏月　定家

たなびかてこそ夜川のうるれさ
ふ人をあくる夏月の影

家集　夏夜暁月　仲正

かりそめはすくるうらたく袖は
ものの月はは月のうる

(詞) 月そかくふく　秋とも　ものさて　ものて
あ　の　の　ものるさ　袖ふ　ものさ　袖
はそ　そ　ものの　ものる　ものさ　ん
ものる　ものる　ものる　ものる　ものる

安き。月の袖もあさ。木ぬれるもこを。
夕すゞみ。そらすゞ〜く。

(連) 夏てこそ光すし名月夜　昌叱
(俳) 夏は月蚊をきぶふて五百友　其角
蚊つるやちろ〜夏て夏は月　芭蕉
(狂) 夏の夜のつまを押むを墨ふ
うくやまくも砂の月うる　素絹

○夏の月はをしきりけを哥ものよむ事なき月のかげを霜はと見たて夏の霜とも云

(詩) 白樂天
月照平砂夏夜霜　此詩朗詠集出

(詩) 唐詩選
林前看月光疑是　地上霜　李白

詩礎

七字對句

涼月照　桃　歇窓倦　水偏清
登泉　繞石　泛觴　遶　松下　涼
山逕　眺雲　収獵　網　足京風

水門涼月　桂漁竿（スイモンリヤウゲツ　カツギヨカン）
月ミヅツリサホニウツル

孤月涼（コゲツスズシ）

夏暁（ナツアカツキ）

(秀) 続後撰　定家

夜の明くるといへども
なほ月ありゆふつけどり
れのまにも似る秋はなりけり

夏朝

夜明てもよろこぶ明て後も云

(秀) 玉葉　雅有

なつのあさかぜ
あらしをあるかぜ
ゆふ立をあるかぜ

夫木　夏朝　為家

夏をあさみ
ふさと浦
さ

夏夕（夏暮）

(秀) 玉吟　俊頼

松ふかぬ
浦人の
ふもとに
ほたるみちけり

(俳) 数いあれどせいたかぬ夏はたゞ夕涼みする道寸

夏夜

(秀) 夫木　入道摂政

夏の沈の汀よりす

かすかに火の光も涼しゆふ夕やみの空
六百番哥合　後京極摂政

うつゝねの夢よりさめぬ
山ちかくなきて一声ほとゝぎす

同　夏夜短　定家

夏のよはあけぬるかとまどろまれ
むすびもあへぬ
ほたるの

(詞) 光りも涼しかりけり
のかくれて火数をつ火風涼しかりけり
ら夏は裏とこそ
月もの
る○数の声。馬よりは

(俳) 夏の夜は秋の初の弧乳の起り　其角
夏の夜は秋の初の弧乳の起り　其角
短夜はあはれ毋の差爆る　一秋
短夜はあはれ毋の差爆る　一晶

(詩) 夏夜五字對句

簟涼清露夜（テンハスズシイロノヨ）　山露侵衣潤（サンロオカシテイヲウルホス）
琴響碧天秋（キンキヒキテアキ）　江風捲簟涼（コウフウマキテテンヲスズシ）

詩　夏夜七字對句

池邊・命海・憐風・月　蹇翠・幃・蕭蕭ニ

浦・中・回・船・惜・芰荷　水・亭・閑・蕭蕭ニ

詩　夏夜之詞　明　揚慎

湘・水・魚・鱗・冷・簟・文　博・山・夷・

篆・罷・爐・薫　魚ノ鱗ドルケシキヲスルニキモノニテミル香

炉ノケムリモキエテスゾシイ　開・牕・對・景・延・新・月

坐・愛・金・波・洗・火・雲　月ニ對シテ涼気ヲオボヘヒヤヽカナル波モ日デリ雲ヲアラヒサヽスカトオモハルヽト

夏山　亀山百首　了雄

いろふかくさんとうなる夏山の色をさき本法ふ富りとめて

連　夏ふかみ世思ん深山ふる　紹巴

非　夏山やかんたけのころくい　畠山重忠

[illegible]むけも夏山のはゝ本車　馬賢

詩　夏山五字對句

山・樹・含・斜・日　秀・木・涵・秀・色

池・風・浸・早・涼　奇・峯・出・奇・雲

詩　同廿字對句　詩礎

凶・谿・鹿・過・苔・還・靜　夏・雲・端・クモノハツレ

深・樹・雲・来・鳥・不・知　冷・溪・山

夏野　亀山殿　為尹

星人も牧多くるん夏

詞　夏の夜の小野くるる星

とこ夏　紹巴

能　夏川の鮎と夏の夏野　一井

連　涼しさ夏野　紹巴

夏川　古今　新

涼しさ秋やかゝひて初瀬川

ふる川世人の秋のはかな　有家

(俳) 卯花や梅はかりは見えぬ川 百菴
夏川のまへに宿かる茶の縁に 重五

△暑し △涼し
暑氣といへれ六月に限るなく
そのまゝあつさといへハ夏三月なれともすゞしといふも
又同し事なり涼 の哥連
俳ハ六月の部廿三丁目に出せ

夏草木

此部よハ夏三ヶ月に
こもるくさ木を記せ

△夏草 (歌) 新古今 藤原元真
夏草ハしげりにけりな玉鉾の道ゆき人もむすぶはかりに

(詞) しげる。あびきる。かれくさ。野への往来。谷かけの野
草のおふ山路。露が露。しげる。
かき葉 庭。なかる。ふかく。しげる
露 しげる葦。藻の葉。浮草。
螢しげりの風もなく 風吹く
夏の香も 拾子 嵐雪

(連) 武蔵野の露をも民の夏衣 宗因
里人 虫

(俳) 夏草やかくれ外さと時の古城 仁宕
夏草に分ともやめくれし槙の雲 鬼貫

△夏木 △夏木立 △若葉 紅葉の結
若葉 △嫩葉 むしのさし

(歌) 玉葉集 院
てふくあらしのそよくとなりて
とうへて稍にかりに（めれれ）
松のみとせも別さりなり
香しく 廿五丁メ出

(俳) 菱垣に結ひ分るゝ若葉かな 鉄山
松の緑あるし夏木立 嵐雪

(詩) 夏木五字對句

拂曙携清賞　緑樹溪邊合
披雲坐緑陰　清山郭外斜

(詩) 七字對句

漠々水田飛白鷺
日月暦

詩礎

陰々夏木囀黄鸝　僧院深

斜陽映閣山当水　樹松雲

微緑含風樹満天　水殿開

詩　夏木之詞　唐　王昌齢

緑樹重陰蓋四隣　青苔日厚

自無塵　夏木立クロミシゲリテ　科

トナリノミヘヌバカリヽ

頭箕踞長松下　白眼看他世上

人心合タ人外ハ文ラ

人ズ松ノ下ニ我マヽニ居ン

夏栁　葉柳　俳かひらぬ袖ひ

ろうをやな柳　秋夕

榊　榊　榊さん　万葉にハ佐宮木花とあり

（お）新勅　重政

神山の榊を松ももろはく

ちぢいろいのうをそなへ

（俳）榊葉ハ虫ふせぎ　ひるの卯ノ日盛

青茶椒　巴椒　蜀椒　○但州朝

倉谷より出るこの

甚美なり丹波丹後ハ其枝を

つさ今ハ波の朝倉と稱ず又奥

州津軽の産大きて氣味勝れり

山椒ハ山せてる時の妙術　灰を

甜ふべし又男ハ女の陰の女

ハ男の陽ぐ〳〵とれば忽ち治ス

もと蘭草を移ぐるもよう

（俳）朝倉ハ丸つ人のまゝ山椒慶友

柚山椒　所々稀ふあり枝葉

相似て香氣柚橘の類

ハ似ようり実長ハのえせう　崖椒　葉大キ

ちて丸カヽずず

細花をのゝこ実ハ緑豆

ゆゝ味美ものゝ　芍葱

春葱　初生針のゝ

酢醬に和し生ニて食ス

△馬歯莧 ○醤瓣草 ○醤杉草 ○金非菜 和名うまびゆ

(排) たしなむも妹より馬ひゆ 丁左

(妙術) まつりの時家の軒に掛置されば馬歯莧其家に入らずといふ

△苔草 ○地層 こけなり

へとそうくさハ

△蕗 ○款冬 ○花ハ七月に花さく 春さく え

△蓼 ○七種あり ○紫 ○赤 ○青香 馬 ○水 ○木蓼なり 播州津田穂蓼と出して年中穂ありといふ

△藜 あかざ 苗とありりのとしてくしふなり茎の成長しうつりのを杖とす

△根芋 和名いもがらし一云いもし 煮て喰ひ剥皮乾ても可也

△蓴菜 ぬなは 嫩茎未ダ葉あらざる物を稚蓴といひ稍の長どなる者を糸蓴といひ秋よいたう老なりのを葵蓴と名づく

△海松 ○水松 状ち松のごとくにして葉なし食用とす

(哥) 夫木 伊勢の海に風にうちよするのよるく浜おのやれ星 定家

(連) 吹きぬとてよるふさ浜しるへつ風 肖柏

(排) こるふみや波にあけたる螺貝 其角

へよりは海の座 ともよるめ仆立甫

△水草の花

(連) 志きりと水までも池のなかに 宗祇

(排) あまま咲や咲なか池乃それ心計

夏生類

此部には夏三月におけるの季のつき物をあつむ

△蚊 (異名) 白鳥 ○暑蟁 ○唐土嶺南に蚊子木有葉冬青の如く実枇杷のごとし熟する時ハ蚊出るといへり ○又塞北に蚊母草あり葉の中に血虫あり此れ化して蚊となるといへり ○又江東に蚊母鳥あり蚊を吐と云

(排) はみおく汲にもなきむ増るれ 鬼貫

狂 蚊と蝿や痩妙なるやのさめ云 其角
はらみするもあらぬへともせるから
たかかゆらんちりやみへき 宗朗

詩 蚊之詞 明 陳成

白鳥向炎時営々聴苦饑 昼ハ
簾幃夜已得志入
嘘吸吾方困飛颺汝自嬉 吾等ハ汝
風一朝至倏忽竟安之 秋風ニ
何処ヘカ逃 清

蚊遣火 △蚊火ともいふ
哥 秦 俊頼
かやり火の煙ふるすことをすずれ
きのむかしきこゑふなり

詞 折ぞ行けん猿がちや。夜あくぞふく。さ此。蚊の声もし

うきさむぜぶ蝿。蕣の声蚊の
声遠きるびく。おさびとし星。不
世わ。夕白への たび様

俳 蚊をやかやつる方其角

狂 蚊の巨燵の内かず架柳

△蚊柱 蚊の多く集りたるを云 俳 蚊
杉の葉の浅きる之 其角

△蛸(ふく) 蚋子。蠓子。山中。俳 浅漆の
唐物ふれてさかりき 台澤

△蛭 水蛭ハ水中ニあり草蛭
ハ草叢ニあり

竿蛭といふ者あり状ながら
おしく大なる者一尺ニおよぶ

△蚕 蝋 俳 詞形や船ニ蚕
とよぶ親かしき 老巣

狂 身の先もそろく売りて痛るれ
これやいふれのきの虫なる 道明

△蛍 新蛍。山蛍。流蛍。異名 丹鳥。夜光。宵燭。丹良。

暉夜半受。燭耀。

夫木　知家

井堂の秋風ふかしやうやうこゑ
こゑまさるこゑぬまさくのはぬ

室治百首　水邊螢　頼氏

くれゐけいこの下くきいたしの
みくさしらつゆよりかるふ

家集　海辺螢　清補

夕風ふるひくの志ほ花さかりこ
こゑまぬ夢のいやうこうるかけう

夫木　樹下螢　隆祐

ときの河うのそいやあさやくをあ
うくく秋なる夏むしのうけ

夫木　旅螢　俊頼

あしつのしやうる紙ゆけの夢つへそ
たくるいくふのこもくをうるくく

家集　螢火乱風　仲正

風ふいくらあるる風ふこあつそ
おのひあつくよりのあむし

常盤井殿合　螢照細流　仲正

夏むしのあを谷河をてらしよい
くあのみひとるこうひのゆ

家集　河辺見螢　好忠

むしの火のかもあくしかくこう川
さとあくられてとよあくこうと

長久哥合　深河螢　経信

いさう火の流るとるとあれも
そあくいるこうるかくくう

同　行路螢　経信

行くれぬはくるすくるわよるくい
まくよしやセあくしくるのゆ

同　古寺螢　経信

今をあるをの林りりくいやや
そくいくくくくくりくくう

夫木　螢火透簾　寂蓮

玉すくれいよせるのむりくれ
おりひあるてもあくわくるる

後拾　沢螢　公雄

花ものをいかりとるる澤りの
くりるあくそりくいりゆくあ

玉葉　叢間螢　左大臣

吹をとるひくくくをのあれくあ
こゑあくあやものあるくん

夏

夫木　江蛍　家長

かつとさしみるしるしは小舟こそ
つりえのをぢる教を持らゆく

夫木　漢蛍　元俊

日くれて神の漢をゆくやうに
さりぐりのかくやくふん

家集　竹裏蛍　讃岐

うつくしみのよこてふこりをうつ
やうるはしうれ光ゆりそり

詞　新てしぐぴう。りゆう。ゆり。
ぬふこうぬぬぬゆゆゆぬぬぬぬ。
ゆう蛍。月月ふきこうろ。暁うげ
うしさ。ゆふ風こてしぐ夕ゆう。
風みこうる。夜沢くもゆう。うて玉
の蛍。ようの蛍。花てゆう。花
をへてりゆる。を蛍井小行。きの
上ましていねべくい雨あいもこ丸。
宵丸　蛍　新ゆうこ蛍ゆうふ。蛍ふまう。
本法。草　茅ちらして蛍と茅いすく。

茅茅ふとこる。茅ふれまげこふ丸蛍
茅茅ふりゆる　水草　ゆ茅ふゆ。
こゆふふく蛍ぶ。うまこて。
茅ゆまふすぐく。茅ノの茅風
ここうく。茅ゆるれゆふげこ。
尾む　おぐるの神ふすゆ。おこるの
りこりゆる　法茅　ちぢふすぐ。
竹　井の茅風ふここうく。吳竹の
茅こふりゆる　笹　ゆこの茅ふの
風ふこぐく。未茅はこる　玉　玉
ふうぐふ。ううくなる　人ゆ　谷
光うゆ丸谷のかそてふ丸　谷川谷
ちびてゆ　野　蛍ゆ　屋。神沢のゆ。夜
茅　ちびてゆ　海辺　海士人のいこう夫
ふまうふ。波を茅こふ。
柳。ゆ茅。うき茅。
て沢　海茅。ふこき。茅。玉茅。
沢神沢。山沢。うふ。こき。玉を　茅ふ
沢　上こ月の　江入江。茅ふ。
檜谷のけこ。ちいこ。　いこれを

夏 生

詩 螢五字對句

江海呼窮鳥 鳥從烟樹宿

詩書問聚螢 螢傍水軒飛

詩 螢七字對句

詩礎

水調楊苑歌九曲 照前流

江邊螢火入燕巢 水上多

荒簷數蝶懸蛛網 弄琴畫

空屋孤螢入燕巢 寄水流

詩 螢火之詞 唐 杜甫

幸因腐草出敢近大陽飛

日光ニ近ツクハナラヌゾ 未

足臨書卷時能點客衣書

ミルホドノ光リハナケレ共路ヲトヲル

人ノ衣服ニチラ〳〵トスルグ

隨風隔幕小帶雨傍林微

風雨ニレタガヒチラメキ飛 十月

カフモトカク小キモノブ

清霜重飄零何處歸霜ノ

頃ニハ〳〵クヘ往 フル

ヤラレメゾ

詩　螢　唐　李嘉祐

映水光難定凌虚體自軽
水面ニ飛カゲソノ光イヅレノ処ニ定メ難ク虚ヲ凌ギ高クトビユクソノ体自然トカロシ

夜風吹不滅秋露洗還明
風フケド螢火ノ燈火ハ滅ヘズ夜露ニアタレド昧カラズ却テ明光ヲ倍ス

向燭仍藏焰投書更有情
火ニムカヘバ光ナケレドモクラカリニテ書ヲヨムニハ少シクタヨリニナルナリ

猶將流亂景来此傍簷楹
乱レ飛フ影ノ簷クチヘ楹ニソフテウツルナリ

詩　螢　唐　鄭谷

故國無心渡海湖老禪方丈倚中條
出テゼンヲチヲヨル

夜深雨絶松堂静一點山螢照寂寥
夜アメヤミ禪室ヘテラシクルホタルスントシタダ

螢故事

義盛略記書
フクロニモリテヒヨヲテラス

晉ノ車胤ハ博覽多識ニシテ書ヲ讀ムヲ好ム家貧シテ常ニ油ヲ得ルヿヲ得ズ夏ノ夜螢ヲ集メテ絹ノ嚢ニ入レ盛リテ昏ヲ照シテ讀ケルト

烏兎知大
務成子螢火丸ヲ製ス

漢ノ刘子南其方ヲ得テ調合シテ佩ケルニアルトキ虜ト戰フテ圍マレケルトキ矢ノ来ルヿ雨ノ如クナリシカ刘子南カ馬ヨリ五六尺バカリニナレバ其矢地ニ墜テ子南ニ中ラズ傷ナカリシ故虜ノ兵モフ思ヒ神ナリトシテカコミヲ解去リシトナリ

螢火丸
一名冠將丸又武威丸ト

モ名ヅク螢火　魁箭羽　蒺藜　各二両　雄黄　雌黄　各二両　羯羊角　燬性ヨ

雄雞ノ冠一具ヲ以テ和シ搗テ千下。丸シテ杏仁ノ如ク三角ニシテ絳囊ニ五丸ヲ盛テ左ノ臂ニ帶テ從軍腰ノ中ニ繫レハ五兵白刃ヲ辟ク家戸ノ上ニ掛ケヲルハバ盜賊ヲ辟ク又能ク疾病惡氣百鬼虎狼蜂蠆諸毒ヲ治ス

合

江州石山寺ふあり此谷の螢常の螢火よ倍と毎年五月の節此後五日夏至の中の後五日に至り十五日の間と盛りよ寺北い橋をかぎり東い川をかぎりて曾て外ふあらぬ時節過る時い宇治川よ至る此所い夏至小暑の間と盛りと然ま共瀬田の多さふもうず俗ふ賴政の亡魂化して成と云々

腐

草化成螢　礼記ふ有

仙畫の法

螢火虫　百枚　雲母石　二分　北ふ砌り末くくして是を筆にて書こ何ふてもひらうと現ざんと思ふ画の上よ操るへくし次す

こ〻ふ二十月の内日の晩よ光り現り寸十二次ふ二年の間光有と

子子　蛣　蠣　蝦蟇　蟲　銀倒虫

此虫化して蚊くあるく

蝸牛　蠡牛　蝸　蝸蠡　蜣蜋　蝸蠡　蜣蜋　蝸蠡　蜣蜋　山蝸　土牛児

名の註　象蟲牛い売ふつくるもの。蝸蠡い蝸い負く売とあくて牛。蝸蠡い蝸い負く売とあくて行心。蜣蜋売とひるのくとくて。蜣蜋売とくてなりあり。

い山よあり天余あるものこう。蝸蠡もちくてくふれそくゆ躰るもの。蜣蜋蠡いあるくくふ

ひきゆりゆくているあくど

まのおとくあるこすり。土
牛いたのあるゆまいり

(分)夫木

寂蓮

牛ぬこふぬまるる庭のかくろあり
角あれいとそ野をまたのくそ

(俳)蝸牛角ふり分よ淀の月　芭蕉
白露や角ふりてもつかさつり　嵐雪
抱き分て家をいろるかさつり　詠子

△蛞蝓　附蝸。土蝸。鼻涕蟲。蛞蝓螺。托胎蟲。陵蟲

○附蝸。土蝸。ともかくつりふ似さる故く○蛞蝓螺も引つりゆくかさちいくく○鼻涕虫いとるとうかくりの出るといく○托胎虫○陵蟲いづれも文字の通りなく

(俳)蛞蝓の殺来ふころ蚊を香　移竹

△夏鷹　夏にうふ鷹ふる小鷹あり雲雀なくに用ゆ

△鷹鳥屋籠　羽を替させんなかふ鳥屋へ放ち置く四月堺入の所さ安一

(俳)切ふり毛ぬとる春やとを鷹　不俎

△鶴　正字詳なり大小ふ一種あり大きるものい頂に白き冠あり小さるものハ此冠赤し

△蠅虎　蠅子　蠅蝗

△蠅　蛆も昏種類多一中に赤頭と忌く淵明ゞ文ゞ見ゆ

(俳)こくの子ぬ蠅ぬさいくさい其角
ふりくくの蠅をおろう韓退子　仝

△鵜川　△鵜飼　鵜舟　陸鵜　△夜川。漁人鵜ふ魚を取さ夫咽ゞ下らざる時其のどを甘せば則ち自ら出を鵜はよかれ漁人の手ふてかさぐを魚を吐く又妙なり濃州長良川至て妙を得ゞる漁人多一一度ゞ十四双を放いるものあり

(分)新古今

牛角ふ分ふれとそ乃ろ夏の夜の

前大僧正慈圓

十三ら川の夕霧乃そ　　安道法師

同

うゑい和そ家さーこは極そたしや
結人生ゆくかうゆ火のうゑ

夫木　　光俊

ゆ川あふ夜ゝ夕ゆし杜へ
うゑいゝまたまたゝ舟ゝたゝく

拾遺愚草　雨後鵜川　定家

うかゝい乗村あをとゞうゝて火よ
雲ゝるの星乃うげとゆゝさゝ

草根　遠近鵜川　慈鎮

空治川のせゝ灯芝代本うゝ仏舟
あゝれゝやゝる桂のしまゝ

詞　夜川　鵜川の篝。夜川ゝろ舟。鵜川ゝう火。ゝいゝる。ゝゝ。ゝゝゝ。

元歌さゝこす　竿　鵜川のさゝは志
りの雲　篝火　ゝるゝゝて火ゆゝう
ゝす。新ゝる。波をゝく。ゝゝ舟。
ゆゝる魚　鵜ゝはゝゝゝゝゝさいく
うゑいゆゝく鵜ゝ子流。身流。ゝる
あのふゝゝ
ところゝゝゝるのゝゝ夜　荻川ゝ

ゝ荻ゆむ。うゝふゝのさゝはゝゝゝゝ
夜。月をゝゝふ雲ゆゝ。篝。鵜川

ゝゝゝ合ゝゝ　後　はのゝゝの雲。はの
ゝ大をゝゝゝ

世ゝゝぬ。鵜舟考ゝ。夕ゆゝ。夕日
のゝゝゝ。月ゝゝ。ゝゝ荻

俳　鵜の新小篝これて義ゝり　荷兮

鵜ふゝて一実ハ茶ゝう星の松　其角
古灯鵜数船清行鵜舟小　全

狂　鵜とは夕ゆい地獄と知るゝ
呑て月をゆる家いい極楽　蘭室

青鷺　蒼鷺。和名ゝゝさ。此頃肉甚美く

き。

通鴨　水鳥ハ凡春い古巣ゝ
ゝるゝ其中池中ゝ
残ゝゝるゝのゝゝて巣ゝい
るゝ居るゝうゝれとゝゝゝ

鮎　異名　年魚　細鱗魚。銀口魚。
ゝ　夫木　　衣笠内大臣

ゝゝゝ鵜ゝ流ゝ荻ゝ
ゝゝ流ゝゝゝゝゝ

詩　松浦川。宇治川。玉しま川。夏川。ちや川。ちくさ川。沢水に蛙萌る。水車。菱萍。

俳　山寺の鰷ゟ鮎や松浦さく　安成

哀の名まあるへき物よ鮎の色　一晶

狂　はうしものゝせじれおひこれへ生れをも又あさらふそめう　滿水

食説に曰[illegible]生じ[illegible]年魚といふ

鮎故事

梅豆羅國（めつらこく）　日本紀神功皇后肥前王島小河ふ鮎を釣りふめづらしき物とて其所を梅豆羅国といふ今松浦といふ誤る

△胡鱅（つなす）　子あり　ふうの

△水鯥（みつゑそ）　潮よひさし　用也蔵

内ふ是を切流し漬るゝとも いうり即水ふその事なり

△水鱧（みづはも）　桶ふ水を入て魚ハつる大坂より大和へ送るふ大和川を船ふて曳乃ゆるこの故ふ水ふはもといふ

△干鱧（ひはも）。海鰻。十頭つくる志らかしにきるものへ

△干鰒（ひふぐ）　俳　ねをよあがる豚　干されて干豚かな　青藍

△魚簗（やな）　やなとをうつハ夏ハ上り下りハ春秋へ春よ委し

△洗鱸（あらひすゞき）　川ふ在ものを佳とす三四寸をせいごといふなり

漫漁軒ふ作りあらひ膾とし熬酒ふて食へ是を洗なますといふ

鮴（ごり）

處々の谷川ふあり其声五里五里といふ

△鮓（すし）　鯵。鮨ともにすしと訓

名物　江州の鮒。濃州の鰷。和州吉野鰷是を釣瓶鮓と名つく。城州宇治鰻鱺[illegible]州福島の小鰡をすしとるづる。和州今井の鯖。越前引田今庄の鰷。これ等ミる名物乃すしなり

蟹鰒 塩漬にするものなり 或は酒又糟に漬しも可し

鹽烏賊 異名 繻魚。塩じめのいか。千烏賊。

夏雜

此部ふは夏三ヶ月の種々の雜事をあつむ

短夜 明安夜 ㊐ 新古今 式内親王

窓ちかう紙竹めしすさの風の音ふかく絶きこゆる秋は愛

詞 すくなきすゝ。明安さ。池の江。無火文閑。庭。蚊の声。月。うさ。秋

連 あらの月ふく秋はいつまでそ袋 宗牧

俳 みじかき夜や旦 枕のあ。不梅船

蚊帳 蚊屋 衣の家

。蚊屋声

俳 望の長い早くのとき蚊帳外 玄流

笠の中とおもふ蚊帳外居

扇 異名 氷纈。雪雀。回風。招涼。かいなり。風う艸。九重艸。

㊐ 新古今

忠岑

[illegible]

詞 風。秋。人。月。紙。うち。月。ゆ。さう。ふる。涼し。[illegible]

秋の扇。まて秋。あ。ぬ。雪の夏。月。あふさす。袖の月。夏の秋。秋

夏扇とる

連 松風もわすれさむ扇外宗祇

扇さへ世を風乃かわり汐宗鼎

俳 心風と後はさきする扇外 実澄

風ものやみそう子扇手風情 [illegible]

狂 [illegible]扇とかんとうこと

[illegible]この白地のあ。まし。そりの 上養

詩 扇五字對句

掩笑須歌扇 中散詩傳画

迎歌生弄絃 將軍扇賣書

詩 全七字對句

詩礎

流風入坐飄歌扇影飄

瀑水當階濺舞衣

逐酒来共徘徊

勾欄時交合歓扇

追抹衣擧石榴裙

涼風前

伏翼 扇ハりく蝙蝠を見て作り出をゆ扇を直

ふかいはりくらい人清少納言の枕草子ふるゝ〜かくちらし〜き

あ去年のかいりくとかけり

(俳)蝙蝠よりもいとゝ窮屈の北枝

團扇 (俳)ひりく〜窮屈の北枝

思ひど菴のうちも昔珍〜ちりとかる

〜礼義ふい拍子ぬけ

(狂)むりく〜茶碗の都は大うちを

茶の上をく風呂よりうり湖松

詩團扇之詞 唐 劉禹錫

團扇復團扇奉君清暑殿

殿ニナゲサメルリ秋風吹庭樹從此

不相見コロヨリトナガカリ上有乘

鳶女蒼々華蟲編明年入懷

袖別是机中練

オトキスルトキハ又タイヒミフカシ

日傘 ひくさともゝ雨傘の如り油をぬりて暑を防くため用

編笠 莞艸を以てこまをつくる 勢州江州より多く出ッ

結夏 △夏籠 △夏佛者四月十六日より七月十六日迄一室に六日より安居して他行せぬを云尚四月十六日の処又夏十九丁ホ見合医

夏断 △夏經 △夏七 △夏小書 △夏断 △安居 ○右いつも

も夏こゝろの内の行大かう夏まつり内ハ佛ゝ花を供無縁の亡靈の
向一又聖經の類を書寫ス俗家も夏斷とゝ房事酒肉等慎む
者あり△安居とゝ夏ハ一所に住まりて居ス
ゝ形心靜攝
ゝ住ゝ要期此ゝ

新麥 早きゝ夏ハ三月ゝ
ゝ物ハ五六月の内ゝ

切麥 △冷麥ゝ天寢の時
ハ溫飩をもちひ
熱の節ハ冷麥ゝ
制ハ夏ゝ寒溫の違ひ

煮冷 △冷汁。夏ハ食物又
ハ汁ゝも器へ入
井水ゝ紀ゝ
ゝ紀食ゝ云

麥飯 (注)ゝ麥ゝ
ゝ麥ゝ禪ゝ

麥粉 (雅)粒ゝの汗を
麥粉ゝ郡 十八

木布 布のゝ
ゝのをきゝ

單物 △汗衫 官家の下
着ゝ俗
或ハ神ゝ
ゝ禰祢ゝ

汗巾 △汗拭△汗手拭 汗
ゝ手中ゝ又
夏の用具ゝ
(雅)ゝ事ゝ汗拭ゝ

必用

此部ハ夏三月ノ
用の事ゝ數多ゝ

夏養生 素問云夏三月ゝ蕃秀
ゝ云天地の氣交ル萬
物繁茂ゝ夜ハ臥一早ク起志ゝ
怒ル事ハ
天氣ゝ
夏氣ゝ養生ゝ

○水ゝ洗浴ゝ
ゝ石ゝ上ゝ

生じ冷なれば疝を生ず○風に當て
卧こなれ風痺等の病を生ず

夏天氣 日蝕黄なるは雨多く風多く
○月は暈あるは多く風と雨

夏風 夏風は中を吹萬物を長養
とする○夏は火に火生土と
土を生ずるは土は中央の位方角にて
いへども干支なれば戌未の方を俗に
五月西にて西風と雨にすなわちの時
節の火氣より火生土の土の方に生じて
吹風あること以て○東風は常は雨なる
ることなれども入梅の中に土用は雨へ
然れども又吹つぎて風西にいたれば雨
なる○南風は時の氣を對して雨へ

夏雲 風の方位にあるべし
こも雨とあるべし

夏霞 暮は西の方赤くして
南へ廻れば日和なり　秋
ふいとうて西より北へまわる